

海外研修サポートセミナー 質疑応答

1) 出発前の語学のレベルはどの程度準備すればいいのか。

・なるべく準備していったほうがいい。

・特に劇場で働く人は、ことばの専門家なので、日本で聞くネイティブの英語のスピードより早口だった。覚悟して行った方がよい。

・語学が出来ないと結局自分のストレスになる。新聞やテレビで情報を得られなかったりすると、生活する上で自分がつらい状況になる。また、アーティストとアーツマネージャーではやはり立場が違うが、アーツマネージャーは日常会話レベル以上に、自分の専門を外国語で相手方に説明できたり、仕事が出来たりしないと、受け入れ先にも迷惑をかける。

2) 出発前に身につけておいた方がいいと思うことはなにか。

・日本人なので、先方が日本の演劇について持っているイメージである歌舞伎や能については興味を持って必ず聞かれた。日本の伝統芸能について、説明できるくらいの知識は持っていた方がよい。

・自分が何者かということ、再確認して行った方がよい。「自分はダンサーである」「自分は俳優である」ということを、きちんと認識していかないと、海外で一度に大量の情報に触れたとき、自分が何者か迷いが出てきたり、なにがしたいのか分からなくなってしまう。その上で、情報に惑わされず、それを取って海外でやる必要があるかどうかということ、考えるべき。

3) 行って帰って来てからの生活はどう考えていたか。それが不安で、海外研修の準備を進められない。

・夜も眠れないほど不安だった。

・劇場を辞めずに 200 日研修に行ったので、帰ってきてから仕事があるという意味ではラッキーだった。

・フリーの制作者の場合は、年度の途中で帰ってくるので、その年の下半期は仕事がなかった。

4) イギリスの劇場で、集客のことで、日本で応用できることがあったか。

・30 歳以下を対象に、1 ポンド公演といって、1 ポンド以上自分が払えるだけの金額を払って観劇するという日を設けていた。それは若者を劇場に足を運んでもらうのに効果的だったと思う。また、レストランやホテルなど、街中いたるところに劇場のチラシが置いてあって、情報が一般に広く行き渡るようになっていた。DMも、芸術監督の名前で、顧客の個人名を入れた郵便やメールが送られていた。内容も興味深く観劇したくなるような特別な文面が工夫されている。

5) 研修に参加する前と後で、自分の活動で変化したことはなにか。心構えなどで。

・行く前は、あまり自分と海外の状況が結びついていないという実感がなかったが、帰ってきてからは、常に自分のとなりにウェールズがあるという感覚を持っている。ことばの壁

はあるにせよ、この芝居が海外に持って行っても分かってもらえるものか、本当の意味でグローバルなものか自問自答しながら芝居を作るようになった。

・なるべくものをはっきり話そうとするようになった。稽古中だけでなく、こういった場でも自分の言いたいことをまとめて話そうと意識するようになった。

6) 劇場内の衣裳などのスタッフは、劇場の常勤スタッフだったのか、公演ごとの契約スタッフだったのか。

・デザイナーは、外から呼ぶこともあったが、実際に作っている人は、劇場に雇われていた常勤スタッフ。

7) 文化庁の在研の年齢制限とは別に、受け入れ先の方で年齢の壁を感じたことはあるか。

・イギリスでは、年齢を聞かれたことは一度もなかった。全く問題ないと思う。

・初級のクラスにいくと、18歳くらいの学生もいたが、日本人は実年齢よりずっと若く見られた。若者の相手をするのは大変だったが、特に年齢制限があったわけではない。

・先方にインターン制度がある場合、先方の制度で年齢制限がある場合は考えられる。

以上